

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17360307
 研究課題名（和文） 霊廟建築における荘厳手法の総合的比較研究
 研究課題名（英文） Comprehensive comparative study on Shōgon ornamentation methods for the mausoleum buildings
 研究代表者
 窪寺 茂（KUBODERA SHIGERU）
 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・文化遺産部・建造物研究室長
 研究者番号：00393372

研究成果の概要：霊廟建築における荘厳手法の様相を究明するために、各地に点在する霊廟建築を対象として、構造・意匠面ならびに装飾技法面から調査研究を行った。調査研究で得た結果の分析、考察は、近世建築に盛んに用いられた荘厳手法である彫刻、金工、木地色付けの3技法の視点から主として行い、墓股彫刻の主題の把握とその配置計画論、地紋彫の意味・役割論、金工技法から見た飾金具論、江戸期における木地色付け技法論、霊廟建築と木地色付けとの相関論などの研究論考に取り纏めた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	3,100,000	0	3,100,000
2006年度	3,500,000	0	3,500,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
総計	13,700,000	2,130,000	15,830,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学，建築史・意匠

キーワード：霊廟 建築荘厳 墓股 地紋彫 金工 漆塗 彩色 近世社寺

1. 研究開始当初の背景

建築史分野における建築研究は、様式・形式論的視点からの研究がこれまで主流を占めており、装飾的側面の研究成果はまだ十分な段階まで至っていないと考えた。特に、建築装飾を技法面から把握する研究は大きな遅れをとっている。この要因として考えられるものの一つに、技法研究に習熟している研究者の少なさがある。

したがって、装飾要素を多く採り入れ具現された近世における諸建築の研究は十分な領域まで展開しておらず、この点は建築史研

究の大きな課題となっている。本研究は、以上の問題意識に基づいて計画された。

2. 研究の目的

全国各地に点在する江戸幕府や諸藩により建設された霊廟建築は、各地の装飾的な寺社建築の建設に多大な影響を及ぼしたと考えられる。霊廟建築に関する既往研究は、日光東照宮建築など、幕府が直接関与した主要建築に限定されており、全国各地の霊廟建築を対象とした研究、さらにはその装飾意匠面の専門的研究は遅れている。

そこでこれらの建築をその構造・意匠面ならびに装飾技法面から調査研究し、近世における装飾建築の荘厳に関わる設計理論・手法を分析して、当時の建築文化の実像を把握するとともに、霊廟建築建設に当たっての建築体制を究明することを、本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 現地調査等、研究対象建築の絞り込み
既往研究、建造物目録等から各地の霊廟建築情報を入手するとともに、霊廟建築の類型や建築装飾手法の特徴を事前に把握し、現地調査を行う対象物件を絞り込み、実施可能な現地調査計画を立案した。

(2) 現地調査の実施内容
各建築調査は、本研究への参加研究者の専門領域に基づき、現地における作業分担（構造形式、彫刻、金工、木地色付け等）を行い、現地調査を実施した。現地では、要所の詳細な写真撮影、実測、観察調書作成などの作業を行った。現地調査時には事後、参加者間で討議を行い、相互の把握内容（研究成果）を共有することにつとめた。

なお、色付け技法研究では、霊廟以外の必要な建築現地調査を実施して、研究の精度を高めた。

(3) 資料収集・整理・分析

幕府関係史料等を入手するための文献資料等の収集を行い、その内容を分析・考察した。

4. 研究成果

霊廟建築の類型に関する研究は、麓和善が担当し、その成果を「霊廟建築の変遷」と題する論考に取り纏めた。ここでは霊廟建築を代表する日光東照宮などに見られる、本殿と拝殿を石の間で接続する複合社殿（通称・権現造）と、仙波東照宮、鳥取東照宮（榑谿神社）などに見られる本殿を唐門・透塀で囲い、接続された拝殿・幣殿と分離した形式（分棟形社殿）とに大別し、建立年代順に各建築の内容を整理した。整理に当たって、当時の文献等から把握される造営形態（施主、奉行、大工棟梁、造営期間等の内容）、建築規模とその形式、建築様式を明示した。この分析結



図1 久能山東照宮

果により、各建築の個別差を把握することができる。したがって、本論考は、本研究のプロローグとして位置づけられるものでもある。

近世建築に見られる特徴的な装飾手法のひとつに彫刻がある。臺股や欄間、壁面などに施された彫刻は、時代が下るにしたがって彫刻技法、彫刻主題も多彩なものとなり、その存在感を主張するようになる。このうち臺股は彫刻が施される部材として力点が置かれるもので、同彫刻の主題とその配置との相関関係を読み解くことは、当時の建築設計原理を究明する上で、重要な課題のひとつといえる。この分野の研究に麓和善は早くから注目してきた研究者の一人である。麓は、臺股は建物全体にわたって同一形状のものが多数配置されるものであり、彫刻の主題をどの位置に配置すればよいかといったこと、あるいはより積極的にどの位置にどのような主題の彫刻を配置するかといったことは、設計者による意図的な主題の選択と配置計画によっていると考えている。霊廟建築における設計手法をこの視点から探ることは重要な研究テーマであり、この分野を麓が担当し、その成果を「霊廟建築における臺股彫刻の主題と配置計画」と題する論考（共著）に取り纏めた。

ここでは権現造形式の建築2棟（久能山東照宮、上野東照宮）、分棟形式の建築2棟（仙波東照宮、金沢東照宮）、本殿単体形式の建築5棟（徳川家霊台、仙台東照宮ほか）を事例としてあげ、臺股彫刻の主題を平面図上の該当位置に記入して、彫刻配置上の法則等の問題を分析した。



図2 仙波東照宮本殿臺股彫刻

一方、彫刻による装飾手法の代表的なものとして「地紋彫」がある。地紋彫はいわゆる器物に施されたものが建築より先行して出現しており、中世に唐物としてすでに渡来している。地紋彫は、木部表面に幾何学的文様などを連続的に彫り出したものの総称であり、建築に見られる最初期のものは久能山東照宮唐門（元和3年・1617）が知られている。初期の地紋彫は比較的に薄肉彫りのものが多く、これが次第に肉厚に仕上げられて行く傾向を持つ。

この地紋彫は霊廟建築にも多く採り入れられており、本研究では伊東隆一が地紋彫に

関する調査研究を担当した。伊東は本研究において現地調査を実施した諸建築のほか、考察対象の建築を広くほかにも求め、地紋彫技法が持つ意味とその役割、さらに、地紋彫の流布する過程などについて分析、考察し、その成果を「地紋彫を使用する霊廟と、地紋彫の彫物技法としての意味」と題する論考に取り纏めた。考察の対象建築の中には、現存していない紅葉山霊廟の建築なども含まれる。

伊東はこの論考で、まず伊達藩内で建築された霊廟建築に見られる地紋彫の内容を挙げ、ここに施された地紋彫を、平面的な彫物の簡略系と位置づけた。次に、徳川家霊廟における地紋彫については、伊東が長年積み重ねてきた研究成果を援用して考察している。ここでは上野や芝の將軍霊廟と、紅葉山の將軍霊廟および將軍夫人や生母霊廟の建築とを比較し、両者の相違が、格付けと対応する建築形式の違いに見られる点を指摘し、さらに後者の彫物が地紋彫を主体としていることから、地紋彫は丸彫りや浮き彫りの技法より1ランク低い技法と理解されると考察した。この点は、御殿建築にも共通するものであるとの分析を、論考中1項目挙げて考察している。

彫物技法における地紋彫のもつ意味については、考察のための事例建築として、浅間神社社殿（静岡県）、岩木山神社本殿（青森県）、柞原八幡宮大門（大分県大分市）を挙げて、地紋彫による装飾手法が日光の建築と深く連関することを、当時の文献を紹介しつつ論じている。



図3 仙台東照宮本殿棧唐戸

霊廟建築の豪華な荘厳性・意匠性を印象づけるものとして飾金具は重要な要素のひとつである。本研究における金具研究は、これまで多くの金工研究の実績を持つ久保智康が担当した。久保による調査研究は、単に飾金具の特性を、表層的な意匠に求めてよしとするのではなく、意匠を実現している彫金をはじめとする金工技法の内容を詳細に観察して分析、考察すること、すなわち、飾金具を製作した鋳工房レベルの分析視野をも

つことを重視している。久保は本研究で実施した現地調査のうち、4箇所調査に参加し、久保のこれまでの研究成果を援用して、本研究での成果を「霊廟建築の金具装飾」と題する論考に取り纏めた。

この論考では久能山東照宮、仙波東照宮、金剛峯寺の徳川家霊台の飾金具に見られる意匠と金工技法の調査結果を報告し、それぞれの特質を、時代性の中で比較して論じている。たとえば久能山東照宮の飾金具は、桃山時代の余風を残しているものの、元和という時代性を明確に示したコンテンプラリーな金具装飾として意図されたものと考察し、仙波東照宮の飾金具は、寛永期建立のものであるものの、桃山期の意匠の特徴を持つものと、寛永期の意匠の特徴を現すものとが併存している点を指摘する。この仙波東照宮の金具製作は、緻密な計画が存在しているとし、これを久保がかつて研究した金沢東照宮（現尾崎神社）と仙波東照宮の大工頭（木原木工充義久）が同人物である点に注目している。

ところで久保は、本研究を行う中で、金剛峯寺徳川家霊台内に安置されている見事な意匠性を持つ厨子に注目した。この建築の飾金具の調査報告をする中で、漆工技法の内容の概説も加え、この厨子の持つ意匠的特徴を明らかにしている。優れた美術工芸的造形を有する徳川家霊台厨子の概要報告として、本研究における久保の成果は注目される。



図4 金剛峯寺徳川家霊台厨子金具（家康霊屋）

漆塗や彩色などの塗装による装飾手法は、わが国における伝統的な技法として周知のものである。そのため、霊廟建築に限らず、日本の歴史的な建築に見られる木部の色付け技法は、この二つの塗装技法によっているとこれまで確信されてきたとって過言でない。

ところが実はそうでないことが近年明らかになりつつある。このことを広く認識することは、建築史研究の今後の行方を左右することであり、研究上の重大な課題でもある。この研究課題は窪寺茂が長年追求してきたことであり、本研究ではこれまでの研究成果を援用しつつ、この研究テーマをより深める

成果を挙げた。研究は窪寺が担当し、その成果を「霊廟建築研究 - 江戸期における木地色付け技法」と題する論考に取り纏めた。

ここで挙げられた木地色付け技法は、漆樹液を塗料溶剤の原材料とする漆塗、膠液を塗料溶剤の原材料とする彩色、植物性油と松脂を塗料溶剤の原材料とするチャン塗、漆樹液ないしは植物性油などを塗料溶剤の原材料とする土朱塗などであり、チャン塗、土朱塗については、江戸幕府関係文書などから見出した施工建築事例を紹介している。この中で、土朱塗については、その技法の実体究明がまだ十分でなく、今後課題を残す結果となったものの、わが国における伝統的な木地色付け技法の全貌が、本研究によりほぼ究明されつつあるのではないかと思われ、今後の建築史研究の発展に貢献する成果を挙げることが出来たのではないかと思われる。

本研究成果として最後に紹介するものは、窪寺が担当した木地色付け手法から見た霊廟建築の設計手法の研究で、その成果を「霊廟建築と木地色付け手法の相関」と題する論考に取り纏めた。

ここでは現地調査を行った各建築に見られる色付け手法の概要報告をするとともに、色付け手法の選択が、霊廟建築の類型と連関している点、建築に使用されている樹種と連関している点を明らかにしている。すなわち、日光東照宮や久能山東照宮など、徳川家、幕府によって直接的に造営された建築が、各種の漆塗や彩色技法によって装飾されているのに対し、地方藩主や寺院によって造営された東照宮や霊廟建築が、透漆塗の技法の採用により装飾されていることが多いことを把握した。前者の建築形式は権現造で、樹種はヒノキによっている。これに対して、後者は分棟形社殿で、樹種はケヤキによっている。この相違は注目すべきものであり、窪寺は当時何らかの社会的、政治的法則が、霊廟建築、特に東照宮建築の造営背景に存在していたのではないかと指摘している。

なお、寛永期造替の日光東照宮建築は、この荘厳手法の法則に合致しない唯一の東照宮建築であり、この点の考察も加えている。

図5 樽谿神社拜殿(分棟形・透漆塗)



霊廟建築における荘厳手法の研究を行う視点はいくつかある。本研究では調査研究を行う中、研究視点の新機軸を提示したいという考えから、彫刻、飾金具、木地色付けといった3種の装飾技法から霊廟建築の実体を把握しようとした。この主旨に則り、研究成果を論考として取り纏めた。その内容は、前記したように、臺股彫刻の主題の把握とその配置計画論、地紋彫の意味・役割論、金工技法から見た飾金具論、江戸期における木地色付け技法論、霊廟建築と木地色付けとの相関論などであり、これらの論考は、刊行した成果報告書にすべて掲載している。

本研究で得た成果は、纏めた論考がすべてではないことはもちろんで、目指した研究は今後も継続していく必要を感じている。本研究で採り入れた調査手法・視点は、これまでの建築史研究に欠けているものである点を、本研究自身、認識している。十分な研究成果を挙げるまでに至っていないものの、この成果が、今後の建築史研究および文化財の修復になんらかの形で寄与することを期待してやまない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

麓 和善「金工芸術の精華 - 名古屋城本丸御殿・二条城二の丸御殿・百工比照」『鏝 建築装飾に見る金工技術』竹中大工道具館、2007年、pp.12-17 査読無

窪寺 茂「三門の黒色塗装仕様」『重要文化財善光寺三門保存修理工事報告書(本文編)』善光寺、2008年、pp.317-320 査読無

〔図書〕(計1件)

窪寺 茂「第9章 視点の転換 塗装技法研究からみた日本建築の姿」伊東隆夫編 2008『木の文化と科学』海青社、2008年、pp.157-174

〔学会発表〕(計1件)

窪寺 茂「造形意識の変革・霊廟建築に見る装飾意匠とその手法」『奈良文化財研究所第102回公開講演会』奈良文化財研究所主催、2008年6月28日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

窪寺 茂(KUBODERA SHIGERU)
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財
研究所・文化遺産部・建造物研究室長
研究者番号：00393372

(2) 研究分担者

藤井 恵介(FUJII KEISUKE)
東京大学大学院・工学系研究科・准教授
研究者番号：50156816
(2005年度～2007年度)

麓 和善(FUMOTO KAZUYOSHI)
名古屋工業大学大学院・工学研究科・教授
研究者番号：80238659
(2005年度～2007年度)

伊東 龍一(ITO RYUICHI)
熊本大学大学院・自然科学研究科・准教授
研究者番号：80193530
(2005年度～2007年度)

久保 智康(KUBO TOMOYASU)
独立行政法人国立文化財機構 京都国立
博物館・学芸課・工芸室長
研究者番号：50234480
(2005年度～2007年度)

大林 潤(OOBAYASHI JYUN)
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化
財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：40372180
(2005年度～2007年度)

(3) 連携研究者

藤井 恵介(FUJII KEISUKE)
東京大学大学院・工学系研究科・准教授
研究者番号：50156816
(2008年度)

麓 和善(FUMOTO KAZUYOSHI)
名古屋工業大学大学院・工学研究科・教授
研究者番号：80238659
(2008年度)

伊東 龍一(ITO RYUICHI)
熊本大学大学院・自然科学研究科・准教授
研究者番号：80193530
(2008年度)

久保 智康(KUBO TOMOYASU)
独立行政法人国立文化財機構 京都国立
博物館・学芸課・工芸室長
研究者番号：50234480
(2008年度)

大林 潤(OOBAYASHI JYUN)
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化
財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：40372180
(2008年度)